

Epistemic Modals and the Syntactic Representation of the Person Restriction on the Subject of Verbs of Thinking in Japanese

Hiromi Sato

In ordinary context, utterances in Japanese often require a speaker-oriented overt modal element in the matrix clause. This paper is an attempt to investigate whether this subject orientation is a matter of a language-particular pragmatic constraint, or the relation between the speaker and the proposition must be syntactically represented through modality. In particular, this paper discusses the subject person restriction and other properties peculiar to certain verbs of thinking used in the matrix context, and presents a proposal concerning the syntactic representation of modality and its roles in syntactic derivation. It will be argued that these verbs are associated with an epistemic modal feature, and that their properties are due to this feature and structural requirements to check it. The paper discusses that the different behaviors of these verbs in different types of subordinate clauses suggest the structural relevance of the modality associated with these verbs.

統語構造における認識の モーダルと「思う」の主語人称制限

佐 藤 裕 美

1. はじめに

日本語では主節に「話者」を起点とするモダリティ要素が明示されなければ自然な発話として容認されないことがしばしばであることはよく知られている。このことは、発話の視点がどこにおかれているかというような語用論的な制約にのみ起因するものであるのか、あるいは統語構造においてモダリティによって「話者」と文が表す命題との関係が規定され得るのかという疑問へと繋がり、命題中心の統語論から細分化され拡張された CP システムによる発話・伝達機能を含めた統語論の進展に向けて興味深い言語事実と分析を提示してきている。本稿の目的は、日本語の「思う」などの主観的思考・認識を表す動詞の特徴的な性質が、モーダルとそれを許可する素性との統語上の関係によって説明されることを示し、それに関連して、モダリティの統語構造における表象とその統語的役割についての提案を示すことである。

2 節では、思考・認識を表す動詞の主文における特徴的な性質を概観し、3 節では、これらの動詞は主文で思考行為を表さない場合、モーダルの性質をも有し、発話者を起点とするモーダル素性による照合が必要であることを議論する。4 節では、従属節でのこれらの動詞に対する制

約が主文の場合と異なり得るのは、従属節の種類により、下位節と話者に関するモデル素性や主節主語との構造的関係が異なることによることを示す。この分析により、これらの動詞の主語に対する制約や解釈上の特徴に対する統語論的な説明が妥当なものであることを示す。

2. 思考・認識を表す「思う」「考える」「感じる」に関わる主文現象

日本語の思考・認識を表す動詞、「思う」「考える」「感じる」は、通常の発話では主文において、一人称以外の主語を許容しない。

- (1) a. (私は) 今度の選挙では政権交代が実現すると思う。
 b. *あなたは今度の選挙では政権交代が実現すると思う。
 c. *ケンは今度の選挙では政権交代が実現すると思う。
- (2) a. (私は) 事故の責任はマリ子にあると考える。
 b. *あなたは事故の責任はマリ子にあると考える。
 c. *ケンは事故の責任はマリ子にあると考える。
- (3) a. (私は) ロンドンの家賃が高いと感じる。
 b. *あなたはロンドンは家賃が高いと感じる。
 c. *ケンはロンドンは家賃が高いと感じる。

主文においてル形は、主語として表されている人物の心的態度を断定する解釈になるが、発話者はある時点における自身の思考以外は断定できないため、一人称主語の場合のみ容認され、それ以外の人称では通常の発話としては不適格な文となる。しかし、三人称の主語をとる (1. c)、

(2. c)、(3. c) のような文は非文ではなく、小説や昔話の地の文などで用いられる「語り」と呼ばれる文体では容認される。「語り」においては主語が表す人物が「語り」の主体であり、その心的態度が記述され、話者が他者の心的態度について客観的に述べているのとは異なる。これらの動詞が過去を表すタ形になると、人称制限が解除されるかのように感じられるのも、「語り」の文体に起因すると考えられる。

(4) ケンはロンドンでは家賃が高いと感じた。

金水 (1989) は次の例を挙げ、「語り」のコンテキストにおいては三人称主語も可能であることを示している。

(5) 蜜子も、SF 作家がバー小説を書き出してはおしまいだと思う。

(筒井康隆『夜の政治と経済』)

(4)、(5) においての心的態度の保持者である主語の「ケン」、「蜜子」が話者であるかのように描かれている。つまり、「語り」のコンテキストでは「語りの主体」が話者であるかのように捉えられ、実際の発話者である一人称以外を容認する。

「語り」とそうでない客観的な言表であるいわゆる「報告」との違いを明らかにするために、三人称主語の場合、丁寧体の「ます」を動詞語尾に付加すると非文となることを指摘する。

(6) *ケンは今度の選挙では政権交代が実現すると思います。

(6) が非文であるのは「ます」は話者から聞き手に対する働きかけに関

するモダリティが関与するため、話者以外の主語が「語り」の主体となる文体とは合致しないためであると考えられ、主語が話者の一人称でこのような不一致がない(7)は可能な文となる。

(7) 私は今度の選挙では政権交代が実現すると思います。

(6)は「テイル形」を用いた「ケンは今度の選挙では政権交代が実現すると思っています」が文法的であるのと対照される。この文ではテイル形を用いることによって話者は、ケンがある期間保持している心的態度を客観的に「報告」しており、話者が起点の丁寧体「ます」を用いることに問題はない。これらの観察により、(1. c)、(2. c)、(3. c)のような三人称主語の文は、話者が主語で表されている人物の心的態度を述べているのではなく、「語り」のコンテキストにおいてのみ可能な文であるとして、一人称主語の文と区別されなければならないことがわかる。

金水(1989)は、日常対話で話者が聞き手にある状況を知らせる行為またはその言表である「報告」において、主観的思考を表す形容詞はタ形であっても三人称の主語は容認されないことを指摘している。

(8) A: そのとき太郎は、どんなだった?

B: うん、*水が欲しかった

次の(9)の対話例は、「報告」のコンテキストにおいては、主観的思考・認識を表す動詞もまたタ形であっても三人称主語を容認しないことを表している。この例によっても、タ形が人称制限を解除するのではなく、「報告」と「語り」の区別が三人称主語の是認に関わるという金水(1989)の主張が支持される。

(9) A：ケンのあの車を見せたときの反応はどうだった？

B：*ケンはあるは高すぎと思った。

B'：ケンはあるは高すぎと思っただろう。

また、聞き手の主観的心理態度を話者が断定することはできないため、「報告」において二人称主語は許容されず、また、二人称で表わされる聞き手を「語り」の主体ととらえることができないため、(10) は常に容認されない。

(10) *あなたはイタリア映画は陰気だと言う／思った。

以上の見てきたように、思考・認識を表す動詞は、「報告」のコンテキストでは主文では一人称主語のみが容認される。この性質のほかに、思考・認識を表す動詞が主文に表れる際には他の日本語の動詞には見られない特徴があることを以下で確認する。

日本語の多くの動詞のル形は主文において発話時との同時性を表さず、発話時以降や習慣的行為の時解釈が与えられるのに対し、「思う」など思考・認識を表す動詞は、発話時以降や習慣的行為のみならず、発話時の心的態度に言及することができる。

(11) a. マリ子は本当のことを知る／調べる／隠す。

b. マリ子は本当のことを知っている／調べている／隠している。

動詞のル形を含む (11. a) の文は、発話時に言及することはできず、「いつか」などの副詞を補うと発話時以降の未来に言及することができ、

また「いつも」を補うと習慣の解釈がされる。これらの動詞はル形ではなく、(11. b) のようにテイル形によって発話時と同時性を表す。これらとは対照的に、「思う」「考える」「感じる」などの思考・認識を表す動詞は、次の例にあるようにル形で発話時との共時性を表すことが可能である。

(12) 私は首相は辞任すべきだと思う。

(12) のように、思考・認識を表す動詞が発話時と共時的に解釈される場合、これらの動詞は、話者の発話時の思考行為を「報告」しているのではなく、発話時における話者の主張を表明していると考えられる。これらの動詞のル形とテイル形は双方とも発話時に言及するが、意味はそれぞれ異なる。

(13) 私は首相は辞任すべきだと思っている。

主文においてル形の「思う」は、発話時の話者による思考行為を伝達しているのではなく、発話時における話者の主張の表明に用いられるのに対し、テイル形は発話時を含むある期間継続して話者が保持している思考態度についての「報告」をしている。

同様の違いが「信じる／信じている」の間にも観察される。

(14) a. 私は彼は無実だと信じます。

b. 私は彼は無実だと（ずっと）信じています。

「信じる」によって話者の決意が表わされているのに対し、「信じてい

る」はある期間継続している心的態度を言表している。「思っている」、「信じている」のこのような解釈は、ある期間に継続している動作／状態を表すという日本語の他の動詞のテイル形の解釈と一貫したものであると考えられる。ル形とテイル形のこのような違いのために、次の例のBの発言では、直前に起こった出来事に対しての意見の表明としてル形のみが容認され、テイル形は容認されないことになる¹⁾。

(15) A：大臣の今の発言はかなり問題だね。

B：(a) うん、辞任に値すると思う。／(b) *うん、辞任に値すると思っている。

「思う」が発話時における話者の主張の表明を意味することは、「思う／思います」が「思っている／思っています」と対比される次の(16)の例によっても示される。

(16) a. 今日はこれで散会にしようと思う／思います。

b. 今日はこれで散会にしようと思っている／思っています。

(16. a) では「思う」または丁寧体の「思います」によって話者の主張が表明されるとともに、会の進行役がこれを発した場合、遂行動詞的な働きをし、発話と同時にその会が散会となる。それに対し、同じ意図を

1) ル形とテイル形の間ばかりでなく、次の例が示すように、タ形とテイル形を用いた返答でも容認度に差がある。

A：ケンはある赤い車については何もコメントがなかったね

B：(i) *彼はあの車は高すぎと思った。／(ii) 彼はあの車は高すぎと思っている。

この対話は明らかに「報告」のコンテキストであり、「語り」の解釈のみが可能な(i)は容認されない。(ii)の「思っている」を用いた発話では、話者は何らかの証拠に基づいて、主語として表されている人物の心的態度を「報告」していることになり、容認可能となる。

もって進行役が (16. b) を発するのは適切ではない。また、「思っている」は、「報告」のコンテキストにおいて主文で三人称主語も容認する。

(17) 進行役はこれで散会にしようと思っている。

このように、「思う」をはじめとする思考・認識の動詞は、他の典型的な日本語の動詞と異なり、そのル形は動詞が表す思考行為を表わさず、また、これらの動詞のル形で発話時に言及することができるが、発話時に言及可能な点では類似したテイル形とは意味的に大きな違いがあることがわかる。

3. 思考・認識動詞とモーダル素性

「思う」などの思考・認識動詞が話者を主語とする場合、その意味は思考行為を報告するものではなく、話者の主張を（断定の度合いを緩和しながら）表わすものであることを見た。この意味で用いられるのは、話者の一人称が主語の場合に制限されるが、この主語に対する人称制限と特徴的な解釈上の性質が何に起因するかについて、本節では主に「思う」を例としながらモダリティとの関連を考察する。また、イタリア語の「思う／信じる」に相当する動詞 *credere* が一人称現在形で示す統語上の特徴についての Giorgi and Pianesi (2005) の考察を踏まえ、これらの動詞の主文現象とモダリティに関わる CP の機能範疇との関連が言語一般の性質である可能性を示唆する。

3.1 2種類の「思う」

前節での考察をふまえ、「思う」を二つに分けて考えることを提案す

る。一つはル形の解釈や発話時に言及するためにテイル形を用いることが必要な点に関して他の動詞と同様の性質をもつ無標の動詞としての「思う」であり、もう一方は、ル形が発話時に言及し、思考行為を表すのではなく主張の表明という遂行動詞的意味をもち、人称制限を課するという特徴をもつ「思う₂」である。ここでは便宜上、前者を「思う₁」、後者を「思う₂」と表し、表記上区別することとする。

以下ではまず、「思う₂」が他の典型的な日本語の動詞とは構造上も違った性質をもつ可能性を指摘する。次の例では、副詞「幸い」は主節と補文のどちらをも修飾することが可能であることを示している。

- (18) a. 幸い、マリコはケンに好かれているとすでに気づいている。
 b. 幸い、マリコは自分がみんなに迷惑をかけていると気づいている。

(18. a) では「幸い」が補文述語の「好かれている」を修飾する解釈と主節述語の「気づいている」を修飾する解釈がある。(18. b) では「幸い」と補文述語の「迷惑をかけている」が意味的に変則的な組み合わせになるため、適正な修飾関係は成立しないが、主節述語の「気づいている」はこの副詞によって修飾される。このように、「幸い」は補文述語のみならず、主節述語を修飾することが可能であることが分かる。このことは、(19) にあるように分裂文として同様の意味を表すことができることからわかる。

- (19) a. マリコがケンに好かれていると既に気づいているのは幸いだ。
 b. マリコが自分がみんなに迷惑をかけていると気づいているのは幸いだ。

これとは対照的に、(20) では「幸い」が補文述語を修飾することはできるが、主文の「思う₂」を修飾している解釈はできない。

- (20) a. 幸い、(私は) 今度の選挙で政権交代が実現すると思う。
 b. 幸い、(私は) 今度の選挙で政権交代が実現すると思います。
 ≠ (私が) こんどの選挙で政権交代が実現すると思うのは幸いだ／幸いです。

(20) における「思う₂」は意味的に推量のモデル「だろう」と類似しており、「だろう」もまた「幸い」によって修飾され得ない点でも両者に共通点がある。

- (21) 幸い、今度の選挙で政権交代が実現するだろう。

また、「思う₂」とは対照的に、テイル形「思っている」は「幸い」で修飾され得る。

- (22) (マリコはケンが療養中に別の男性と駆け落ちしたのだが)
 幸い、ケンマリコが事故で死亡したと思っている。

上の文で、「幸い」と「思っている」の間の修飾関係が成り立つことは、(23) の分裂文によっても示されている。

- (23) ケンがマリコが事故で死亡したと思っているのは幸いだ。

副詞「幸い」による修飾が可能かどうかについての考察からも、「思う₂」が、テイル形「思っている」や他の動詞と異なる性質をもつことがわかる。「思う₂」が「幸い」のような評価の意味の副詞によって修飾され得ないことは、「思う₂」が統語上、これらの副詞による修飾が不可能な位置にあることを示唆しているとも考えられる。さらに、「思う₂」が発話時に言及した解釈をされることも、発話・伝達に関わる主文の CP システムと関わりを持っていることを示唆している。上記 (21) で「思う₂」とモーダル「だろう」の副詞による修飾に関する類似点を指摘したが、ここで示唆された CP システムとの関わりの点でも「思う₂」はモーダルと重要な共通点があると考えられる。

「思う₂」は主文では一人称主語に限定され、主語の思考行為を報告しているのではなく、話者の主張の表明をしている。ただし、その主張において、話者は「思う₂」によって断定の度合いを弱め、主張内容の真偽、妥当性について確信はないことを示している。この意味的な性質はモーダルの「だろう」と共通するものであることが、次の例が示すように、「思う₂」が「だろう」と共起した場合容認度が落ちることからも示される。

(24) ?? (私は) マリコは司法試験に一度で受かるだろうと思う。

話者による推量を表す「だろう」は、認識のモーダルのカテゴリーに属し、構造上、命題を表す TP の上位に生成すると考えられる。(cf. 井上 (2005)、長谷川 (2005)、上田 (2005)) すでに上で見た、副詞による修飾に関する「思う₂」と「だろう」の共通点、発話時への言及を含めた意味的類似点を踏まえると、「思う₂」と「だろう」が主文で共起できないという事実は、この2つが同じ統語的位置あるいは素性について競合

していると考えることが出来る。以下では、イタリア語で見られる一部「思う₂」と類似した現象に対する提案も踏まえ、「思う₂」は動詞でありながらモーダル素性をもつという提案を議論する。

3.2 イタリア語の *credo* ‘(I) believe’ の主文現象

以上で考察した「思う₂」の性質と関連しているとも考えられるイタリア語についての事実が Giorgi and Pianesi (2005) で議論されている。Giorgi and Pianesi (2005) (以下、G&P (2005)) は、主文において *credo* ‘(I) believe’ は動詞としてではなく、認識 (epistemic) の機能範疇の主要部として生起することがあると主張している²⁾。

具体的には、補文標識の *che* に後続されない場合、一人称単数現在の *credo* は主節動詞として空の補文標識が導く補文を選択する場合と、主文 CP の認識の機能範疇の主要部として単文構造の中にある場合があるとしている。G&P (2005) は、補文標識 *che* が後続しない *credo* を含む文の中に、補文主語の位置³⁾、焦点句 (Focus) や題目 (Topic)、発話行為に関わる副詞句の生起などに関して、空の補文標識による補文構造をとるとは考えられない特徴をもつ文があることを指摘している。これらの文で *credo* は機能範疇の主要部であり、補文をとるのではない

- 2) Giorgi and Pianesi (2005) は、*dicono* ‘(they) say’ もまた主文で証拠性 (evidential) の機能範疇の主要部になることができ、その場合は、補文をとるのではなく、文全体が単文構造を成すと主張している。
- 3) 空の補文標識による構造 (Complementizer Deletion: CD) と補文主語位置の関係について、イタリア語話者の反応が2つに分かれる：動詞の前に明示の主語が表れる状況で CD を許容する話者 (A) と、その状況で CD を許容しない話者 (B) の2グループに分かれる。
 - (i) #*Maria crede Paolo abbia telefonato*
Maria believes Paolo has (SUBJ) called
 - (ii) *Credo Paolo abbia telefonato*
(I) believe Paolo has (SUBJ) called
 (i) は、(B) の話者にとっては非文であるが (# で表されている)、(ii) に関してはこのような判断の差はなく、全てのイタリア語話者が文法的と判断する。つまり、CD の環境において主語が動詞の前に表れた文を容認しないイタリア語話者にとっても、*credo* を用いた (ii) は文法的であり、空の補文標識を含む文とは区別される。

とする彼らの議論の中から、ここでは発話行為に関わる副詞 (speech act adverbs) の分布と時副詞の解釈に基づく議論を紹介する。

Cinque (1999) などで示されているように、発話行為に関わる副詞 (speech act adverbs) は補文内では許容されず (26. a)、また、補文標識が空の補文内でも許容されない (26. b)。

- (25) Francamente, Gianni si e' abagliato. (=G&P (52))
'Frankly, Gianni was wrong.'

- (26) a. *Maria credeva che francamente si fosse sbagliato. (=G&P (53))
'Maria believed that, frankly, he was wrong.'
b. *Maria credeva, francamente, si fosse sbagliato. (=G&P (58))

(26. b) とは対照的に、credo の後に補文標識がない (27) の場合、francamente が生ずることが可能であることが示され、(27) は (26. b) のように空の補文標識をもつ補文構造をとるのではないことが示唆されている。

- (27) Credo, francamente, si sia abagliato. (=G&P (61))

また、credo を含む文全体が単文構造であることを支持する議論として、時の副詞句の解釈の対比が挙げられている。

- (28) a. Ieri alle cinque credo Gianni mangiasse un panino. (=G&P

(26))

yesterday at five (I) believe Gianni was eating a sandwich

b. #Ieri alle cinque Paolo crede che Gianni mangiasse un panino. (=G&P (27))

c. Paolo crede che ieri alle cinque Gianni mangiasse un panino.
(=G&P (28))

Paolo believes that yesterday at five Gianni was eating a sandwich

(28. a) で時副詞の *ieri alle cinque* はサンドイッチを食べた時間を表している。しかし、ポーズを挿入するなどしない通常のイントネーションでは、(28. b) は (28. c) と同じ解釈ができず、(28. a) と明らかに区別される。また、(28. b) で時副詞句は現在時制の主節動詞に言及することもできない。ここに見られる差異により、(28. b, c) とは異なり、(28. a) が単文構造であることが示唆される。

イタリア語では *credo* が補文をとる動詞ではなく、CP システムの中の認識の機能範疇の主要部となり単文構造を形成することができるという G&P (2005) の提案は、本稿の主題である思考・認識を表す動詞と認識のモデルとの関わりが日本語に特異な現象でなく言語一般の性質である可能性を示唆している。

4. 従属節の「思う₂」

ここでは、従属節における「思う₂」の分布や主語の人称制限の考察から、「思う」などの思考・認識を表す動詞は、動詞素性に加え、話者などの心的態度の保持者指向のモデル素性をもつことが可能であるこ

とを提案する。主語の制限や発話時への言及などのこれらの動詞に特徴的な性質はこのモダル素性の照合の結果であり、従属節においてもこのモダル素性の照合が「思う₂」の分布を決定することを示す。

4.1 「思う₂」と「から」節、「とき」節

南（1974）は、日本語の副詞節を、その内部に含まれる要素を分析し、意味的、統語的特徴を記述することにより、A類、B類、C類、D類の4種類に分類している。田窪（1987）はこの4分類に統語分析を加え、副詞節はその主要部が補部として選択する範疇によって以下のように内部構造が異なることを示している。

- A = 動詞句（様態・頻度の副詞＋補語＋述語）
- B = 節（制限的修飾句＋主格＋動詞句＋（否定）＋時制）
- C = 主節（非制限的修飾句＋主題＋節＋モダル）
- D = 発話（呼びかけ＋主節＋終助詞）

さらに、Rizzi（1997）、Cinque（1999）が提案するCPシステムの枠組みで捉えると、B類はTP、C類はModal Phrase、D類はForce Phraseに対応する。ここでの議論で重要になる点は、この分類によると、Modal Phraseを含むのはC、D類のみであることである。A類、B類はそれぞれVP、TPであり、その上位のModal Phraseは含まれない。

「思う₂」がModPの主要部による照合が必要だとする仮説のもとでは、ModPを選択する接続助詞が導く副詞節では「思う₂」が容認されるが、ModPが含まれない副詞節においては容認されないことが予測される。まず、ModPとの関係において、異なる接続助詞による副詞節の違いに

ついて考察することとする。

次の(29)～(30)では、時の副詞節である「とき」節、原因・理由を表す「から」節の中での、認識のモデルで「推量」を表す「だろう」、「否定推量」を表す「まい」の分布が表されている。

- (29) a. *ケンが大学を卒業するだろうとき、景気もきっと回復しているはずだ。
 b. *高速道路が渋滞するまいとき、車での旅行を計画すべきだ。
- (30) a. マリコが買ってくるだろうから、ケーキは買わないでおこう。
 b. 大雨にはなるまいから、レインコートは着ていかない。

(29) と (30) の対比が示すように、「から」節では「だろう」、「まい」などのモデルが起こりえるのに対し、「とき」節ではこれらのモデルが起こらない。したがって、接続助詞「から」が選択するのは、ModPであるのに対し、「とき」が選択するのは、TPであると考えることができる。この観察に基づくと、「思う₂」は「から」節には起こるが、「とき」節には起こらないことが予測される。

- (31) a. ハイブリットカーの需要はもっと伸びると思うから、価格がもう少し下がってから買うことにする。
 b. 車を買いたいと思うとき、僕は燃費とデザインを重視する。
 c. 今の車がいよいよ買い替え時だと思うとき、電気自動車もかなり普及しているだろう。

(31. a) の「から」節に含まれる「思う」は主語が表す人物による思考行為を報告しているのではなく、その人物による主張を和らげながら表す機能を果たしている。また、文の発話時に言及していることから、「思う₂」であると考えることができる。これと比較して、(31. b)、(31. c) に含まれる「思う」は性質を異にする。(31. b) は発話時や文脈に顕在する特定の時についてではなく、ある思考をもつ時一般について述べている。(31. c) では主節が発話時以降の未来に言及することにより、「思う」に対しても発話時以降の時解釈が強いられる。また、(31. b)、(31. c) の「とき」節は、ある思考行為が行われている時間上の点に言及している。これらの点から、「とき」節に表れる「思う」は「思う₂」とは性質が異なり、後者は ModP を含まない「とき」節には起こらないという予測が支持されることになる。

上の議論を要約すると、モーダルの「だろう」「まい」が生起できず、ModP を含まない「とき」節には「思う₂」が起こらず、これらのモーダルが生じ ModP を含む「から」節には「思う₂」が起こることで、ModP と「思う₂」の分布の関係が支持された。しかしながら、副詞節の中で、この結論に一見矛盾する状況を呈するものがある。原因・理由を表す「ので」節においては、モーダルの「だろう」「まい」が生起することはできないが、「ので」節に起こる「思う」は「とき」節に起こるもののように習慣や未来の時解釈しか許さないものとは異なっている。

- (32) a. *マリコが買ってくるだろうので、ケーキは買わないでおこう。(cf.(30. a))
 b. *大雨にはなるまいので、レインコートは着ていかない。(cf.(30. b))

- (33) ハイブリットカーの需要はもっと伸びると思うので、価格がもう少し下がってから買うことにする。(cf.(31. a))

(33) は上記 (31. a) とほぼ同義であり、これら2つの文中の「思う」は話者の主張を表しており、その思考行為に言及しているのではない。したがって、(33) の「思う」も (31. a) におけると同様「思う₂」であると考えのが妥当であろう。「ので」節内に Mod による照合が必要な「思う₂」が起こるにもかかわらず、モーダルの「だろう」や「まい」が生起できないことに関して、ここでは接続助詞「ので」が認識のモーダル素性を含んでいるために、さらに別の認識のモーダルが生じることが出来ないと考える。

「ので」は名詞化する助詞である「の」と格助詞の「で」から形成されていると考えられる。「の」が名詞化の働きをしているのは、次の(34)の例が示すように、「で」が名詞に直接後続し、そのみで原因・理由の意味を表すことが出来ることから分かる。

- (34) 仕事で子供の授業参観には行けない。

名詞化する「の」は、井上 (1976) が主張する補文標識の性質をもつ「の」として分析し、断定のモーダルの素性を含むと仮定する。「の」が断定のモーダル素性を含むと考えられる根拠は、「ので」と同じように名詞化する助詞「の」と助詞「に」からなる接続助詞の「のに」に関する観察から得られる。「のに」節においては「ので」節におけると同様、モーダルの「だろう」「まい」は起こらない。

- (35) a. *ケンは選挙運動をしなくても当選するだろうのに、熱心に

街頭演説をしている。

- b. *ケンはこの選挙では当選するまいだろうのに、熱心に街頭演説をしている。

しかしながら、逆接の「に」のみがこれらのモデルに続くと、次のように容認可能な文となる。

- (36) a. ケンは選挙運動をしなくても当選するだろうに、熱心に街頭演説をしている。
b. ケンは今回の選挙では当選するまいに、熱心に街頭演説をしている。

(35) と (36) の対比は、名詞化する助詞「の」と認識のモデルは双方が互いに競合する素性を持ち、相補的な分布をすることの裏付けとして捉えることができる。

以上の議論から、「ので」節に含まれる名詞化する「の」は断定のモデル素性をもつと考えられ、これにより、「ので」節は ModP を含むが、「だろう」「まい」などの別のモデルを含むことが出来ないことが説明可能となる。「ので」節は ModP を含むとすれば、(33) のように「思う₂」が分布可能であることも説明される⁴⁾。

4) 逆接の「のに」節も「の」のモデル素性により ModP を含むと考えられるため、「思う₂」が起ることの説明がつく。

(i) 今回の選挙では自民党は惨敗だと思うのに、やっぱり自民党候補を応援してしまう。「だろう」「まい」のような明示的モデルがある場合と異なり、「思う₂」などの動詞の後に「の」を欠いた逆接の「に」のみが続くことは、現代口語では容認されない。

(ii) *今回の選挙では自民党は惨敗だと思うに、やっぱり自民党候補を応援してしまう。しかし、近代の文体では「に」が動詞や形容詞のすぐ後に来ることが容認されていた。

(iii) 日中の照りに乾いて、きょうは道が好かったに、小庭の苔はまだ濡れている (森鷗外『蛇』)

近代以降、逆接の「に」はモデルと動詞、形容詞を区別するようになったことが推測さ

4.2 副詞節と Mod 素性の照合

前節では、「から」節、「ので」節など ModP を含む副詞節と ModP を含まない「とき」節での「思う₂」の分布の違いを考察し、「思う₂」が Mod による許可を要するという提案が支持されることが示された。本節では副詞節における「思う₂」が主文におけるそれと異なる現象を示すことを考察し、これは副詞節における Mod 素性の照合が主文におけるそれと異なるためであり、「思う₂」の分布に Mod が関わっていることを裏づけるものであることが議論される。Mod による照合が必要であるという性質をより明示的にするために、「思う₂」をこれ以降は「思う [+mod]」と表すこととする。

主文において、主語が一人称に制限され、そのル形が発話時に言及することができる「思う」を「思う [+mod]」として区別し、これらの性質は話者が起点となるモーダル素性を含むことに起因すると考えてきた。しかし、「思う [+mod]」が生起可能な副詞節においては主語の人称制限に関して、主文とは異なった現象が見られる。

次の「から」節、「ので」節を含む (37)–(38) は、それぞれの (a) では一人称が主語であるが、(b) においては、「思う」の主語は、主節主語と同じ、三人称の「ケン」という解釈しか成り立たない。

- (37) a. 私は、マリコは医者に向いていると思うから、医学部に進学させたい。
b. ケンは、マリコが医者に向いていると思うから、医学部に進学させたがっている。

- (38) a. 私は、不動産価格はもっと下がると思うので、マンションの購入はしばらく待つことにする。
- b. ケンは、不動産価格はもっと下がると思うので、マンションの購入はしばらく待っている。

(37)–(38) では三人称主語の場合も一人称主語の場合と同様、「思う」は、主語で表されている人物の思考行為の報告を行っているのではなく、発話時におけるその人物による主張を表している。これは、「思う [+mod]」が許可されない「とき」節において、「思う」が発話時や主節が表す時と共時的解釈はされず (cf. (40. a))、発話時以降の未来や習慣の時解釈しか認められないことと対照される (cf. (40. b))⁵⁾。

- (40) a. *ケンは、犬を飼いたいと思うとき、ちょうど保健所で保護されていたクロと出会った。
- b. ケンは、犬を飼いたいと思うとき、きっと犬と散歩する時間がもてるようになっていだろう。

このことから、「から」、「ので」節に見られる「思う」は三人称が主語であっても「思う [+mod]」であると考えられる。主節では一人称主

5) 「とき」節と「ので」節の違いに関して、Tenny (2006) は、感覚形容詞による人称制限が「とき」節では解除されないのに対し、「ので」節では解除されることを指摘している。以下の例文は Tenny (2006: 250) の (13)–(14) をローマ字表記より書き換えたものである。

(i) 彼は寒かったとき、暖房を入れた。

‘When it was cold, he put on the heat.’

*‘When he felt cold, he put on the heat.’

(ii) 彼は寒かったので、暖房を入れた。

‘Because it was cold, he put on the heat.’

‘Because he felt cold, he put on the heat.’

この両者の違いも、主観的な感覚に関わる Mod 素性による承認の有無によって説明可能であると考えられ、Tenny (2006) もその方向に沿った分析を提示している。

語に制限されていた「思う [+mod]」が副詞節ではなぜ三人称主語を許可するかについて詳しく議論する前に、これらの副詞節を含む文における主節主語と従属詞節の主語の関係を見てみることにする。

まず、これらの副詞節では「思う [+mod]」が常に三人称主語を許可する訳ではない。次の例では、思う [+mod]」の三人称の主語が主節主語と同一ではなく、容認可能な文にならないことを示している。

- (41) a. *ケンがマリコが医者に向いていると思うから、メグミは
 (あの子を) 医学部に進学させたがっている。
 b. *ケン是不動産価格はもっと下がると思うので、私はマンションの購入はしばらく待つことにした。

(41. a-b) の副詞節の動詞を「思っている」に置き換えた (42. a-b) は容認可能な文となることから、これらの副詞節の主語は主節主語と同一である必要がないことがわかる。

- (42) a. ケンがマリコは医者に向いていると思っているから、メグミ
 は (あの子を) 医学部に進学させることにした。
 b. ケン是不動産価格はもっと下がると思っているので、私はマンションの購入はしばらく待つことにした。

以上の観察から、思う [+mod]」が理由の副詞節において三人称主語を許可するのは、主節の主語も副詞節のそれと同一である場合に限られることがわかる。

さらに、主節主語が一人称でない場合、理由の副詞節では話者である一人称であっても「思う [+mod]」の主語になることはできない。こ

れは、主節では「思う [+mod]」の主語が一人称に限られていることを踏まえると、興味深い事実である。

- (43) a. *私はマリコは医者に向いていると思うから、ケンはその子を医学部に進学させたがっている。
 b. *私は不動産価格はもっと下がると思うので、ケンはマンションの購入はしばらく待つことにした。

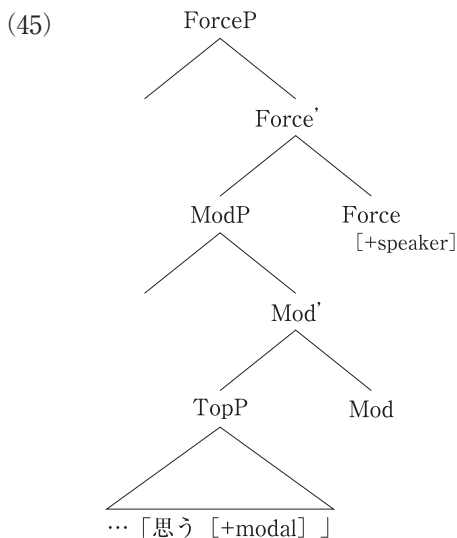
また、理由の副詞節の主語が明示的でない場合、「思う [+mod]」の空主語は主節の主語と同一指示の解釈のみが可能で、たとえ一人称の話者であっても、主節主語と異なる解釈はできない。

- (44) a. $\text{pro}_i / *_{\text{speaker}}$ マリコは医者に向いていると思うから、ケン_iはその子を医学部に進学させたがっている。
 b. $\text{pro}_i / *_{\text{speaker}}$ 不動産価格はもっと下がると思うので、ケン_iはマンションの購入はしばらく待つことにした。

つまり、理由の副詞節内においては、「思う [+mod]」の主語は、人称に関わりなく主節主語と同一でなければならないことになる。主文における「思う [+mod]」の主語の人称制限は、「思う [+mod]」が Mod に移動して素性が照合され、さらに Mod は ForceP の発話の主体と発話時に関わる素性、[+speaker]、によって承認されなければならないことによると説明される。理由の副詞節においては「思う [+mod]」の主語が一人称に制限されないことから、この副詞節の Mod は [+speaker] 素性以外によっても承認可能でなければならないことを意味する。理由の副詞節で「思う [+mod]」が許可されるのは、その主

語が主節主語と同一である場合に限られることから、理由の副詞節の Mod は主節主語の素性によって承認されると考え、因果関係の論理的判断の主体が主節主語である場合にのみ理由の副詞節で「思う [+mod]」が許可されることを提案する。

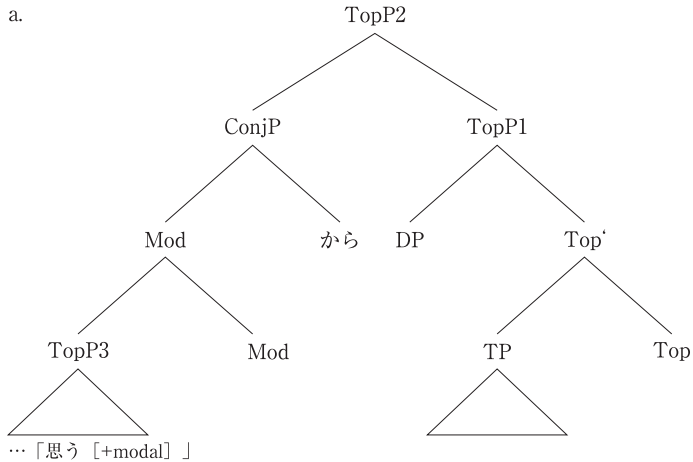
ここで、主文と副詞節を含む複文における「思う [+mod]」の素性照合をそれぞれ図に示して比較しておく。まず、主文では「思う [+mod]」の D 素性は、T、Mod を経由して最終的に Force の [+speaker] 素性によって照合されることになる。したがって、主文では「思う [+modal]」は常に主語が話者を含む一人称に制限される。



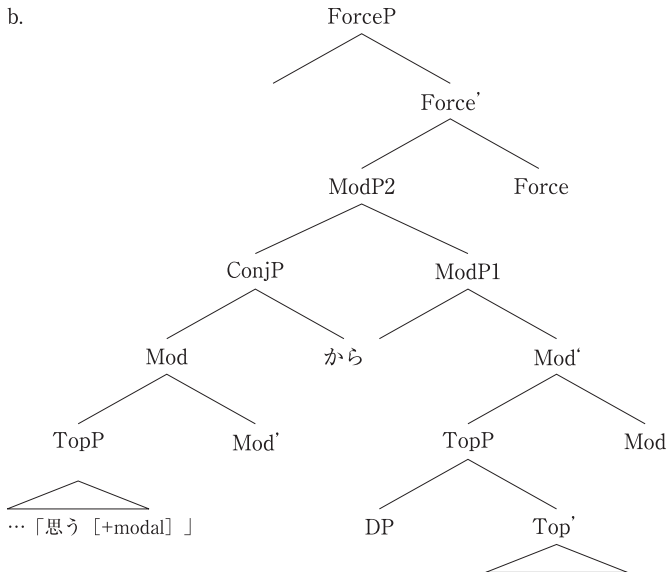
理由の副詞節の場合と主節の関係については、2通りの可能性が考えられる。因果関係についての論理的判断の主体が、主節主語で表されている人物の場合と、文の発話者の場合があるので、それに対応して統語構造もそれぞれ異なることが想定される。主節主語が因果関係の論理的

判断主体を表す場合、その構造は下の (46. a) のように、理由の副詞節が主節の TopP に付加した構造であると考ええる。それに対し、話者が論理的判断の主体である場合は、(46. b) が示すように、副詞節は主節の ModP に付加していると考ええる。

(46) a.



b.



理由を表す接続助詞「から／ので」は、ある現象の認識に基づく因果関係の論理的判断を行う主体の存在を前提にしている。「から／ので」の補部の ModP の認識・判断の主体に関する素性と「から／ので」の素性が一致し、Mod の D 素性は「から／ので」のそれによって照合されなければならないと考えられ、さらに「から／ので」D 素性は主節の素性によって照合されなければならないことになる。(46. a) のように、理由の副詞節が主節の TopP に付加した場合、「から／ので」の D 素性は、主節の Top の D 素性、つまり主節主語の D 素性と一致し照合されると考える。結果として、「思う [+mod]」の主語が主節主語と同一の場合のみ派生が収束することになる。

(46. b) のように、理由の副詞節が主節の ModP に付加した場合、主節の Mod の D 素性により照合されなければならないが、後者は上記(45)の場合と同様、Force の [+speaker] 素性により照合される。したがって、(46. b) の構造の場合、「思う [+mod]」の主語は話者に限られることになる⁶⁾。

これまで「思う [+mod]」の主語は主節主語と同一でなければならないとしてきたが、(46. b) も可能な構造であるとする、理由節の「思う [+modal]」の主語が話者で、主節主語が話者以外である文が可能であることが予測される。この予測が正しいことは、次の(47)のように、認識の主体が話者であることを示す明示的モデルが主節にある場合、主節主語は「思う [+mod]」のそれと異なり、話者以外であることが可能であることによって示される。

6) 主節主語も理由節の「思う [+modal]」の主語も一人称の話者の場合、(46. a) と (46. b) のどちらの構造を仮定しても結果的に同じ解釈が与えられることになるが、以下で議論するように、主節 Mod に明示的なモデルがない場合は常に理由節は主節 TopP に付加すると仮定する。

(47) 明日は雨が降ると思うから、ケン仕事は休むだろう。

この文は「思う [+mod]」の主語と因果関係の判断主体が話者である解釈と、その両方が主節主語の「ケン」である解釈が可能である。前者の解釈では、(48. a) が表しているように、ケンが会社を休むという話者の予測は、明日の天気についての話者の判断に基づいていることになる。後者の解釈では、(48. b) が表すように、ケンは自分の明日の天気についての判断に基づいて会社を休む、というのが話者の予測の内容になる。

- (48) a. [[明日は雨が降ると思うから] ケン仕事は休むだろう]
 b. [[明日は雨が降ると思うから] ケン仕事は休む] だろう

(48. a) は上記 (46. b) の構造をもち、理由節の「思う [+mod]」、「から」は話者である一人称の D 素性をもち、認識のモーダル「だろう」として表層している主節の Mod と一致し、照合されなければならない。主節の Mod は Force の [+speaker] によって照合されるため、「思う [+mod]」の一人称の素性は許可されることになる。

(48. b) は上記 (46. a) のように、モーダル「だろう」が表層する Mod の補部に理由の副詞節が付加した TopP がある構造となる。(46. a) が示すように、理由節の D 素性は主節の Top のそれによって照合されるため、この場合は「思う [+mod]」の主語は主節主語「ケン」と同一であるという解釈になる。このような二通りの解釈が可能な文によって、(46. a) と (46. b) の 2 つの構造が可能であることが裏付けられる。

理由の副詞節が「思う [+mod]」を含まない場合は、理由節の認識と因果関係の論理的判断の主体に関わる Mod、「から／ので」の D 素性とそれに対応する主節の素性との一致関係のみによって説明されることになる。次の (49) は理由節の Mod、「から／ので」の D 素性は主節の Top によって照合される (46. a) の構造をもち、理由節で表されている判断の主体が主節主語である「ケン」であることが説明される。

(49) 今日は雨が降っているから、ケンは仕事を休んだ。

これに対し、(50) では理由節で表されている判断の主体が、「ケン」である解釈と、話者の解釈が可能である。

(50) 今日は雨が降っているから、ケンは仕事を休んだのだ。

前者の解釈は、(51. a) に表されているように、理由節が主節の TopP に付加し、その拡張された TopP が断定のモデル「のだ」として明示されている主節の Mod の補部になっている構造によって説明される。話者が理由節で述べられている判断の主体であるとする後者の解釈は、(51. b) が表すように、理由節が主節の ModP に付加し、主節の Mod は Force の [+speaker] によって照合されるため、理由節の Mod-「から」もそれと一致し、話者が論理的判断の主体であるという解釈になる。

- (51) a. [[今日は雨が降っているから] ケンは仕事を休んだ] のだ
 b. [[今日は雨が降っているから] ケンは仕事を休んだのだ]

理由節が「思う [+mod]」ではなく「思っている」を含む場合も、

「思っている」の主語の D 素性が Mod によって照合される必要がないので、理由節が表す判断主体は「思っている」の主語とは違う主節主語や話者であることが可能である。次の (52. a)、(52. b) では「から／ので」の D 素性は主節の Top によって照合され、主節主語を理由節の判断主体とする解釈のみが可能であると予測される。

- (52) a. ケンがマリコは医者に向いていると思っ**て**いるから、メグミは（あの子を）医学部に進学させることにした。
- b. ケンは不動産価格はもっと下がると思っ**て**いるので、私はマンションの購入はしばらく待つことにした。

(52. a) の理由節は「ケン」の思考行為に基づく「メグミ」の論理的判断を表し、(53. b) の理由節は「ケン」の行為に基づく「私」の判断を表しているという解釈のみが可能であり、上述の説明が正しい予測を示されることが示される。

日本語では、上記 (49) のように文末が時制辞の「ル／タ」で終止している場合、音形のない「断定」のゼロモデルが仮定されるが（井上 2007）、(49) で話者を理由節が述べる判断主体とする解釈はかなり困難であろう。これは、判断主体が、話者や主節主語などの「態度保持者 (bearer of attitude)」は明示的に一致しなければならないという原則が働いているためであると考えられる。この原則によると、下記 (53. a) – (53. b) のように（上記 (43) – (44) を一部再録）、主節で話者以外が主語で、話者指向の明示されたモデルがない場合、理由節を主節 ModP に付加し、その判断主体を話者とする文は非文となり、正しい予測をする。

- (53) a. *私はマリコは医者に向いていると思うから、ケンはその子を医学部に進学させたがっている。(= (43. a))
- b. $\text{pro}_i / *_{\text{speaker}}$ マリコは医者に向いていると思うから、ケン_iはその子を医学部に進学させたがっている。(= (44. b))

ここで示された提案は、動詞補文における「思う [+mod]」の生起に関しても正しい予測をする。下の例文 (54. a) では、「思う」の主語と主節主語が同一指示であり、「思う [+mod]」としての解釈が可能である。(54. b) では「思う」の主語と主節主語は同一指示ではなく、「思う」は発話時以降の時、つまり「未来」の時解釈のみが可能で、「思う [+mod]」とは解釈されない。

- (54) a. ケン_iは [自分_iが岡田氏が次期首相に相応しいと思うことを] 認識している／悔いている。
- b. マリコ_jは [ケン_iが岡田氏が次期首相に相応しいと思うことを] 認識している／悔いている。

これらの文に用いられている主節動詞は心的態度を表し、その主語は「態度保持者」であるので、これが「思う [+mod]」の主語と一致している場合には「思う [+mod]」が許可されると考えられ、本稿の提案に沿った説明が可能となる。

4.3 「が」節

主節においては主語が話者の一人称に制限されている「思う [+mod]」が、理由を表す副詞節である「から」節、「ので」節で一人称以外の主語を許可するのがどのような仕組みによるのかを議論する中

で重要であったのは、因果関係の論理的判断を行う主体と主節が表す「態度保持者」との関係である。論理的判断を行う主体と「態度保持者」が同一であることが要求され、その要求が満たされる環境において、「思う [+mod]」は一人称以外の主語を許容する。この説明が妥当な限りにおいて、このような論理的判断主体と「態度保持者」との関係が要求されない複文においては、従属節の「思う [+mod]」の主語の主語に関する制限が理由節の場合と異なることが予測される。以下では、理由節と性質が異なる従属節を含む文として逆接・対比の意味を表す接続助詞「が」による複文を例に挙げ、そこでの「思う [+mod]」の主語の人称についての考察を通して、前節で提示した提案が正しい予測を示すことを示す。

逆接・対比の「が」節では、理由節の場合と異なり、「思う [+mod]」の主語が後続節の主語と同一である必要がないことが次の例からわかる⁷⁾。

- (55) a. 私は国産車のほうが良いと思うが、ケンはずデザインでヨーロッパ車を選んだ。
 b. ケンはドイツ車が良いと思うが、マリコはイタリアのスポーツカーに憧れている。

(55. a-b) が容認可能であることは、理由節の「思う [+mod]」の主語が主節主語と異なり非文となる (43. a-b) と対照的される。ただし、

7) 「が」節も理由の「から」節などと同様、認識のモデルに続くことができることから、ModPを補部にとることができ、Modによって「思う [+mod]」が照合されると考えられる。

a. ケンはアメリカに転勤になるだろうが、家族は日本に留まるらしい。

b. 今どきこんな服を着たがる人はいるまいが、一応ガレージセールに並べておこう。

(55. b) が容認可能なのは、「語り」のコンテキストにおいてのみである。

さらに、「が」節の主語が明示的でない場合、音形のない主語代名詞の解釈として三人称の後続節の主語と同一指示が容認されるのは「語り」のコンテキストにおいてのみであり、通常の発話である「報告」のコンテキストでは、pro は話者をさす解釈のみが可能となる。これは、上記 (44) で示されたこれに対応する理由節と主節の主語の指示関係と全く逆の現象である。

(56) $\text{pro}_{\text{speaker}/i}$ 不動産価格はもっと下がると思うが、ケン_iはあのマンションをすぐを買うことにした。

以上のことから、「が」節と後続節との構造的関係は、理由節と主節との関係とは異質のものであると考えられる。また、意味的にも、理由節と主節におけるような論理的判断の主体の解釈に関する依存関係もないと考えられる。接続助詞「が」は2つの ModP が等位接続すると仮定すれば、「が」節においては「思う [+mod]」の主語に対する制約が理由節におけるよりも緩和されていることに説明がつく。「が」節の ModP は後続の ModP に付加しているのでなく、したがって、依存関係がなければ、「が」節の「思う [+mod]」の主語の許可は後続節の主語とは関わりなくなされることになる。「が」によって接続された上位の ModP を選択する Force の [+speaker] 素性によって「が」節の Mod、 「思う [+mod]」 が照合されれば、(55. a) や (56) のように「が」節の「思う [+mod]」は話者を主語とし、「語り」のコンテキストでは「語り」の主体が [+speaker] 素性をもつと考えられるので、「が」節の「思う [+mod]」は「語り」の主体として三人称主語を容認

することになる⁸⁾。理由の副詞節と「が」節における「思う [+mod]」の主語に関する制限の違いを考察することを通し、「思う [+mod]」の主語の人称制限が構造と関わっていることがさらに確認された。

5. おわりに

「思う」などの思考・認識の動詞は、主文において主語の人称制限があるだけではなく、ル形が表す意味においても典型的な日本語の動詞とは異なる特徴を示す。本論文では、これらの動詞がモーダル的な性質を持つことを提案し、Modによってその素性が照合され、さらにModの素性が話者あるいは命題に対する態度保持者に関する素性によって照合されることによりこれらの動詞に特徴的な性質が説明可能であることを示した。従属節においてはそのModを照合する認識を含めた命題態度の保持者は話者のみとは限らないので、「思う [+mod]」は三人称の主語もとりうる。従属節で「思う [+mod]」の主語が三人称の場合、「語り」のコンテキストの主文で「思う [+mod]」が三人称主語をとる場合と基本的に同じ仕組みが機能していると考えることができる。本論文の議論を通して、話者や命題に対する態度保持者といった発話・伝達に関わる存在が統語構造上も表象され、素性照合を通して構造を規定していることが主張されたが、これらが構造上の実態としてどのように具体化されるべきかについては今後さらなる考察が必要である。また、本論

8) 本文の例文の「が」節と後続節の主語を入れ替え、「が」節に三人称、後続節に一人称主語を配した次のような文は容認可能性が著しく下がる。

(i) *ケン は 国産車のほうがいいと思うが、私はデザインでヨーロッパ車を選んだ。

(ii) *ケン は 不動産価格はもっと下がると思うが、私はあのマンションをすぐ買うことにした。

これについての説明は、本文で提示された分析に基づく、「が」節の主語が三人称であり、「語り」としての解釈が必要になるが、後続節で話者である一人称主語が表れ、「語り」／「発話」の主体としての両者の対立のために容認可能性が下がると考えられる。

文の主張に沿って考えると、[+mod] をもつ「思う」などの動詞は、「意見の表明／主張」という発話伝達機能をもつので、命令、禁止などの発話・伝達のモデルに後続されないことが予測される。

- (57) a. マリコが正しいと思え。
b. マリコが正しいと考えろ。
- (58) a. ケンがいつも助けてくれると思うな。
b. ケンがいつも正しいと考えるな。

(57) の命令文、(58) の禁止文に「思う」、「考える」が生起可能であることから、本論文が正しい予測をしていない印象も受ける。しかし、上記の文では「思う」、「考える」は思考行為を表し、そのような行為を命じたり、禁じたりする意味で用いられている。この観察が正しいとすれば、(57)–(58) で用いられている動詞は [+mod] をもたない、テイル形になることが出来る「思う」、「考える」であることになる。このような観察を踏まえ、[+mod] をもつ動詞とモデルやモダリティと関連する副詞などとの共起の可能性についてもさらに検証する必要があるだろう。

参考文献

- Cinque, G. (1999) *Adverbs and Functional Heads: A Cross-Linguistic Perspective*. Oxford: Oxford University Press.
- Giorgi, A. (2006) 'A Syntactic Way to Subjunctive,' University of Venice Working Papers in Linguistics, Vol 16, pp. 97–135.
- Giorgi, A. and F. Pinaesi (2005) 'CREDO (I BELIEVE) : Epistemicity and the Syntactic Representation of the Speaker,' University of Venice Working Papers in Linguistics, Vol. 15, pp. 105–152.

- Rizzi, L. (1997) 'The Fine Structure of the Left Periphery.' In *Elements of Grammar*, L. Haegeman (ed.) pp. 281-338. Dordrecht: Kluwer.
- Tenny, C. L. (2006) 'Evidentiality, Experiencers, and the Syntax of Sentience in Japanese,' *Journal of East Asian Linguistics*, Vol. 15, No. 3 pp. 245-288.
- 井上和子 (1976) 『変形文法と日本語』大修館書店。
- 井上和子 (2007) 「日本語のモーダルの特徴再考」長谷川信子編『日本語の主文現象』ひつじ書房。
- 上田由紀子 (2007) 「日本語のモダリティの統語構造と人称制限」長谷川信子編『日本語の主文現象』ひつじ書房。
- 金水 敏 (1989) 「『報告』についての覚え書き」仁田義男、益岡隆志編『日本語のモダリティ』くろしお出版。
- 田窪行則 (1987) 「統語構造と文脈情報」『日本語学』第16巻第5号、pp. 37-48。
- 仁田義男 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房。
- 長谷川信子 (2007) 「1人称の省略：モダリティとクレル」長谷川信子編『日本語の主文現象』ひつじ書房。
- 南 不二男 (1974) 『現代日本語の構造』大修館書店。